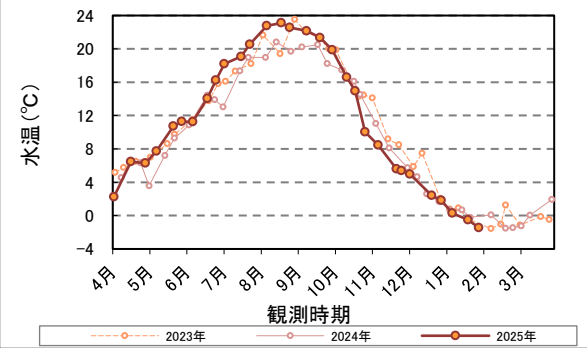


◎オホーツクタワーの動物プランクトン分析速報 (2026年1月)

※海洋観測：紋別市、動物プランクトン分析：(株)エコニクス

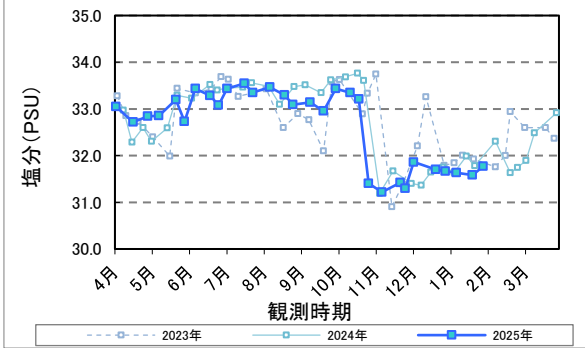
海洋環境データ

◎水温

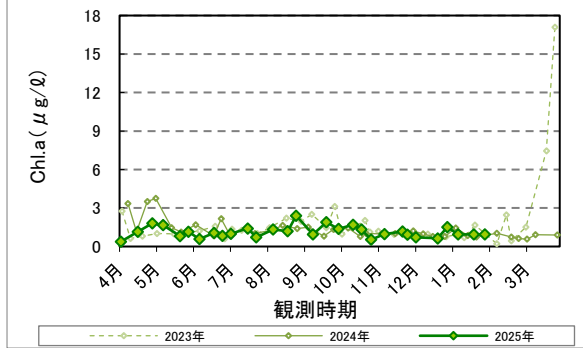


※水温、塩分、Chl. aは0~9mまでの平均値である。
※2026年1月25日：流水初日、2月2日：流水接岸初日 発表

◎塩分



◎Chl. a



出現量の多かった種類



・Acartia hudsonica
(カイアシ類：アcartia属の一種)
体長：♀0.8-1.2mm、♂0.7-1.0mm。北米東岸、北岸および九州以北の北西太平洋沿岸、内湾、汽水域に分布する。日本では内湾が汽水域に分布が限られる。



・Pseudocalanus minutus
(カイアシ類：Pseudocalanus属の一種)
体長：♀1.4-2.1mm、♂1.1-1.6mm。北半球の亜寒帯・寒帯および北太平洋温帯寒流域に分布する。日本周辺では親潮流域に分布し、山陰沖からも報告されている。



・Pseudocalanus newmani
(カイアシ類：Pseudocalanus属の一種)
体長：♀0.9-1.5mm、♂0.8-1.2mm。北半球の亜寒帯・寒帯および北太平洋温帯寒流域に分布する。東北以北の沿岸では冬季最盛期カイアシ類の1種となる。



・Oithona similis
(カイアシ類：Oithona属の一種)
体長：♀0.7-1.0mm、♂0.6-0.7mm。日本では各地の内湾、沿岸、外洋で普通に出現する。各大洋に広く多く分布するが、比較的冷水を好み、外洋より沿岸に多い。



・Copepoda (nauplius)
(カイアシ類のナウプリウス幼生)
カイアシ類の発生途中の幼生。脱皮を繰り返して複数の発生段階を経て成体になる。海産魚類の仔魚生後には餌としてのカイアシ類のナウプリウス幼生密度が決定的といわれている。

概要

Table with 4 columns: Date (1月6日, 1月19日, 1月28日), Average Temperature (°C), Average Salinity (PSU), Average Chl. a (µg/L), and Main Species. It details the composition of plankton samples from NORPAC and standard nets.

※海洋環境データ欄の水温、塩分、Chl. aのグラフは、水深0~9mまでの平均値をプロットしたものである。平均水温、平均塩分、平均Chl. a欄の数値は、表示の都合上、水深0~9mまでの平均値を小数第2位で四捨五入した値で示し、グラフ上の表示と異なる場合がある。

※種名の先頭に「◎」がつく種類は、出現量の多い種類を示す。[]内の「+」はサンプル中の個体数の多さが後述の程度であると判断し、区分したグループである(+)出現、(++)やや多い、(+++)多い、(++++)かなり多い、(++++)極めて多い。

※種名の後ろの記号は、分析者の経験から北海道における出現傾向に後述の特徴があると判断し、区分したグループである(●)冷水性種、(●)暖水性種、(■)汽水性種。

※1月のサンプルには腐植質(主に枯死・分解した植物由来の物質)が多く含まれており、沈殿量の数値はこれを含む。

※参考文献：

List of scientific references including works by Kikuchi (1997), Wilson (1966), Pinchuk (2002), and others, related to marine plankton and environmental data.